

現代短歌分類辭典

別名現代短歌總索引

第二十二卷

津端修編纂

津 端 修 編 纂

現代短歌分類辭典

第二十二卷

昭和四十四年六月三十日発行 定価四五〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 修

東京都中野区上高田二丁目九の一六

発行所

津 端 修

振替 東京六七三四一番
電話 三八七局八四二九番
郵便番号 一六四

目

次

(第二十二卷)

歌数	頁数	歌数	頁数
熱き③	四〇	小豆畑(あづきばた)	一
厚き①	一〇二	小豆畑(あづきばたけ)	三
篤き②	九	小豆飯	三
あつき③	二	あづき餅がゆ	一
厚着	三	小豆餅せーむ	一
厚着	二	厚木行	一
厚木	二	小豆ら	一
小豆	四九	暑く(未然形)	一
小豆色	三	暑く(連用形)①	一四八
小豆粥	四	熱く②	二八
小豆坂	一	熱く③	四八
厚岸	一	厚く④	五八
厚着しーて	一	篤く⑤	四
あづき島	一	厚く⑥	一二
小豆汁	一	あつく⑦	一
あづきのみめ	一		

あつく⑧
あづくる
暑ぐるし
暑ぐるしき
暑苦し
暑苦しけれ―ば
暑苦しき
アックワ アケト―ザ
あづけ
預けおき
暑けき①
あつけき②
あつけき③
あづけ来―ぬ
暑けく
あつけさ
あづけ―し

一 二 八 四 四 一 一 一 二 二 一 一 一 三 一 三

兎 厚岸草(あつけしさう)
厚化粧
厚岸湾
あづけ―ず
預け―たてまつる
預け―たり
あづけ―たる
あづけ―つ
あづけ―つつ
預け―て
暑け―ど
あつけなき
呆気なく
暑げに
預け―に
暑け―む
あづけ―む

一 二 一 一 一 一 二 一 一 一 一 一 一 一 一 一

𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔

あった(連体形)
 圧倒さーるる
 あったかい
 篤胤の大人
 熱田の神
 熱田の宮
 熱田の社
 熱田東参道
 熱田まつり
 あっーたら
 あっち
 安土城趾
 逢っーちゃった
 安土山
 アツツ
 アツツ島
 逢っーて

二四
 一
 一
 一
 四
 二
 一
 一
 一
 一
 一
 三
 一
 一
 三
 二
 三

一五 あっーて
 〃 あっーてた
 〃 あつと
 一五 厚葉
 〃 アツパ(神父)
 〃 厚葉がくり
 〃 圧迫
 〃 圧迫感
 一六 圧迫する
 〃 厚葉垂葉
 〃 熱灰
 一六 熱灰焼
 〃 天晴れ(あっぱれ)
 〃 天晴の(あっぱれの)
 〃 厚茸
 一三 厚総(あつぶさ)
 〃 厚衾

四五
 一
 三
 二五
 一
 一
 二
 一
 一
 三
 一
 一
 二
 一
 一
 一
 一

一三
 一六
 一七
 〃
 一六
 〃
 一七
 〃
 〃
 〃
 〃
 一七
 〃
 〃
 〃
 一七
 〃

厚衾する	一	一三	東国人（あづまくにびと）	一	一三
アップルバイ	一	〃	あづま会	一	〃
あつぽったい	一	〃	あづま下駄	一	〃
あつぽったし	一	一四	吾妻小富士	一	〃
東国（あづま）	二九	〃	あづましぬび	一	〃
吾妻（吾妻山の略）	八	一七	吾妻高嶺	一	一四
同（吾妻橋の略）	一	〃	東太郎	一	〃
同（わが妻）	三二	一六	東路	一九	〃
東一華（あづまいちげ）	一	一八	集つて	五	一六
東歌	二	一八	あづまてる	一	一七
東団扇	一	〃	東人（あづまど）	二	〃
吾妻嵐	一	〃	あづまなだ	一	〃
東鑑	四	〃	あづま錦絵	一	〃
東川	一	一三	吾妻嶺	一	〃
吾妻菊	三	〃	吾妻の国	八	一八
東下り	二	〃	吾妻の峰	一	一九
東国（あづまぐに）	二	〃	東の京（あづまのみやこ）	三	〃

吾妻の山	六	一五〇	あつまらーん	一	一五七
吾妻橋	四	〃	集り	一五	〃
吾妻橋市場前	一	一九二	同	四一	一九六
吾妻橋二丁目停留所	一	〃	集りー合へーり	一	一九三
束国人(あづまびと)	二	〃	集りあり	一	〃
あづまびとら	一	一九二	あつまりー落つる	一	〃
あづまますらを	一	〃	集り来り	一	〃
束女(あづまめ)	一	〃	集まりーきたる(終止形)	四	二〇三
あづまもののふ	一	〃	同(連体形)	三	〃
あづまや	二九	〃	集り来ーて	一	二〇四
あづまやくに	一	一九五	集り来	一	〃
あづまやづくり	一	〃	集りくる	一〇	二〇五
吾妻山	八	〃	集りくれーば	一	〃
吾妻やまはら	一	一九六	集りこーざる	一	二〇六
吾妻山なみ	一	〃	集りーし	一〇	二〇七
集まらーぬ	一	〃	集まりー住めーば	一	〃
集まらーむ	一	〃	あつまりーたる	一	〃

集りーて
 あつまりどころ
 集りにーけり
 聚まりーにーつつ
 集りーぬ
 集りやすき
 あつまりより
 集りよりーて
 集りゐーたり
 集る(終止形)
 同 (連体形)
 集るー如く
 集るーごとし
 集まるーや
 あつまるーらし
 集るーらしき
 あつまれ

一二二
 一
 九
 一
 九
 一
 一
 一
 五
 二
 四五
 一
 一
 一
 一
 一
 四

二七 集れーど
 二七 集れーば
 〃 集れーり
 二六 あつまれーりーけり
 〃 集れーる
 二九 あつまれーるーごとし
 三〇 あづま男(あづまを)
 〃 東雄桜
 〃 東男(あづまをとこ)
 三三 あづま男の子
 三五 温海(あつみ)
 三五 厚味(名詞)
 〃 厚み(形容詞)
 三六 熱み(形容詞)
 〃 安曇
 〃 安曇国原
 〃 安曇郡

二
 六
 九
 一
 二五
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一

二六
 二七
 〃
 二六
 〃
 二四
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃

安曇里人
 あつみ山
 安曇平
 厚み―たる
 あづみ峯
 安曇野
 温海のうみ
 渥美の海
 渥美の郡
 渥美の岬
 渥美の島
 安曇の平
 渥美の山
 温海の湯
 渥美半島
 安曇米
 安曇群嶺

一 一 一 一 一 一 一 二 二 一 二 一 一 一 六 一 一

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
 集め―けん
 集め―ける
 集め―けり
 集め来―て
 集め来―し
 集め来り―て
 集め―おはさ―む
 集め
 集め
 集むる
 集む
 渥美小島
 安曇雪野
 渥美山
 温海山
 安曇群山

一 一 二 八 二 一 一 一 一 一 三 二 一 一 一 一 一

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

集め去る	一	二六	集めーに	三	二九
集めーし	二九	〃	集めーぬ	二	二八〇
集めーしーごとき	二	二六	あつめはじむ	一	〃
集めーしーごとく	一	〃	集めーまし	二	〃
あつめーしーならーむ	一	〃	あつめーます	一	二八二
集めーた	一	〃	集めーむ	一	〃
あつめーたまふーな	一	〃	あつめやりーたり	一	〃
集めーたり	六	二七	あつめ行く	一	〃
集めーたる	一	〃	集めーられーて	一	二八三
あつめーたるーらし	一	二六	あつめる(終止形)	一	〃
あつめーつ	一	〃	同(連体形)	三	〃
集めーつつ	一〇	〃	あつめるーたりーし	一	二八三
集めーて	一〇七	二九	あつめるーて	二	〃
あつめーで	一	二六	集めゐる(終止形)	一	〃
あつめーてる	一	二九	同(連体形)	一	〃
あつめーなーば	一	〃	あつめをり	一	二八四
厚目に	二	〃	あつもの(羹)	二八	〃

敦盛
 敦盛草
 敦盛塚
 厚やかに
 厚雪
 厚らかに
 厚らなる
 厚らに
 厚ら葉
 あつらへ
 誂へーき
 あつらへーし
 あつらへーて
 あつらへーにーけり
 あつらへーむ
 あつらへーられーし
 あつらへーん

一 一 一 一 三 三 一 一 二 一〇 九 二 一 三 二 二 五

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
 二六 圧力
 二七 当つる
 〃 あつるーごとく
 〃 当つれーども
 二八 当つれーば
 〃 厚藁
 〃 敦夫
 二九 あて(名詞)
 〃 貴(あて)
 三〇 当て(動詞)
 三一 亜庭の湾
 〃 アデイユ
 〃 亜庭湾
 三二 当てがたし
 〃 あてがはれ
 〃 あてがはれーたる
 〃 あてがひ

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 二 一 一 一 一 一 一

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

あてがひーき
 あてがひーつ
 あてがひーて
 あてがひやりーて
 あてかひやる
 あてがへーば
 当て来ーし
 あてーざらーむ
 あてーし
 あてーじ
 あてーしむ
 あてーしめーつ
 あてーしめーて
 あてーず
 アーティスト
 あてずっぽうな
 あてーたーやうな

一 一 一 三 一 一 一 二 五 一 一 一 一 一 二 一 一

〃 〃 〃 三二 〃 〃 三〇 〃 〃 三〇九 〃 〃 〃 三〇八 〃 〃 三七

合計

三、一一七

あつき③【形容詞】「熱き」「暑き」

冬来たる野なかの家に炉をもして熱きあづきをもてなされつつ

片山 広子

ふるき友寄りて親しみ夜ふけぬ熱き蕎麦食はむと我は言ひいでぬ②

鹿児島 寿蔵

まだ熱き火をおもむろに掻きわけて我が戦友のお骨をひろふ③

村上 葭穂

まはだかに錨を負ひて追ひて行くまぼろし見えて熱き沙かな④

與謝野 寛

道こえてあふるる清き溝川に山下りきてあつき両脚ひたす①

岩上とわ子

診つつこは絶望と知れり熱き鉛俄かにもわが咽喉もとをながる

対馬 完治

水飲みて暑き昼餉を終へにしがなかにたまゆら心せまり来

柴生田 稔

身に沁むる活字の冷えにいくたびか熱き湯呑みてひろひつつけぬ①

伊藤 保

身の皮や熱きは痛き時過ぎて艾の火くづほろろ消につつ④

北原 白秋

み冬づく朝餉親しも味噌汁の熱きを吹けばくもる朱の椀

田中 緑夜

蒸寿司の熱きをおきて見たりけり風わたる庭の青竹叢を①

中島 哀浪

あつき③

あつき③

蒸したての熱きさつまいもくらひつつ世の慾もなき夕餉を思ふ⑤
眼鏡をかけそめてより幾年ならむ熱き夜蕎麦を食ひつつおもへば

鹿児島寿藏
岡野直七郎

珍しくけふの昼餉はたきたてのあつき飯なり冬菜漬そへて

若山牧水

椀につぐ熱き白湯より湯げむりの短く立つも春の朝なれ

土田耕平

焼きたてのあぶらしたたる大ぎれの鴨の焼肉熱きを啖らふ②

神原克重

焼りんご熱きを買ひぬ雪深きスイスの夜の山駅にして⑥

岡本かの子

焼けただれ赭き岩間にあつき湯噴き谷底の水に落合ひ流る②

橋田東声

焼山の熱き温泉はたたへたり人らほけて浸りたるかも

前田夕暮

山寺をなかば下りて杉の木蔭の茶店に熱き蒟蒻を食ふ③

結城哀草果

ゆくりなく触れしわが手の熱きをば母言ひたまふ夕餉はこびて①

金田千鶴

湯殿山一の木戸なる薬湯のあつきを飲みていろいろ話す⑥

斎藤茂吉

湯の宿にちかづく心すでにたぬしあつき豆腐を思ひつつをり

橋本徳寿